

## ことばの慣れのプロセス

### —— 日常語と専門語 ——

水野光晴

外国語の学習で、絶えずわれわれの頭を悩ますのは未知の単語の意味であろう。たとえば、英語の単語にしても、ある単語の意味は一つとは限らない。だから文章を読む場合、その文脈で、ある単語が辞書に載っている何番目の意味で使われているかを決定することはとりわけ学習初期の大きなハードルである。

イリノイ大学の語彙調査では、高校卒業程度の人が持っている平均的な語彙数は約45,000語から60,000語であろうと推定している。しかし、英米人が日常生活で行なうコミュニケーションの90パーセント強は、基本的な1,000語以内の単語で行なわれているのである。他方、専門用語も、その分野の原書に絶えず接していれば、それらの単語が異なった文脈で絶えず現われる。その結果、それらの語は2~3カ月もすれば馴染みあるものとなり、自由に意味がとれるようになる。単語の慣れ(熟知性)は、異なる文脈の中でその語に接する頻度数に大きく左右されるといえる。

しかし、新聞やジャーナルなどを万遍無く読んでいる場合は、なかなかことばに対する慣れが付き難い。これは新聞やジャーナル特有の単語や慣用法がある上に、内容のジャンルもあらゆる分野にわたっているため、単語の熟知性が形成され難いことによるものと考えられる。

一般に成人は、読む際にすぐ利用できる複雑な視覚的情報の膨大な蓄積をさまざまところから獲得する。そこで、人がある単語を読むとき、統

一的な知覚が自動的に瞬時に、しかも無意図的に生じる。この現象はストロープ効果とよばれる。その結果、単語をまとまりのある単位として再認する能力が獲得されてくるのである。つまり、われわれは1つの単語に出会う機会が増えれば増えるほど、ますますその単語に馴染むようになり、ますますそれを再認できるようになる。したがって、ある単語についての熟知性があればあるほど、ますますそれを再認するのに要する時間も短くなる。このことから、単語を再認することが、読みのプロセスの決定的な構成要素であることがわかる。

英米人が日常使用する単語に対する慣れを身に付ける一つの方法として、1,000語以内の語で書かれた本を大量に読むことが考えられるであろう。しかし、この種のリーディング教材は幼児向き、青少年向きのものが多く、大人が満足できる内容のものは数も限られているので痛し痒しの感無きにしても非ずであろう。そこで私は現在、英米社会で日常多用される基本語約1,000語から成るグローバル・イングリッシュのライティング用教材を作り、学生にすすめている。

グローバル・イングリッシュは、今を溯ること60年ほど前に、ケンブリッジ大学の言語心理学者であったC.K.オグデン博士の遺志を受け継いでいる。彼は全人類が英語を通して意思疎通をはかることを願って、ベーシック・イングリッシュという「簡易英語」のシステムを考案した。このシ

システムは、国際コミュニケーションの道具としてまさに申し分のない条件を満たしていたのである。大著『意味の意味』の作者である彼は、その語彙選定を有用性に基づいて行った。その結果、各語の有効度はきわめて高く、非常に平易で豊かな表現が可能になった。また、学習語彙も少なく済み、その語彙も音節の少ない語から成っていて、同音異義語がほとんど無いため発音上の混乱もない。さらに、英語は西欧の諸言語に較べて、屈折（語尾変化）が単純であり、その語彙も国際的な広がりを持っている。さらに、ドイツ語やフランス語のアクセント符号のようなものが無いため、綴り字や発音を学習するうえでも負担が少ない。しかも、彼のシステムには、機械的な通信のための特別な工夫が施されていた。とりわけ、オグデンは語学の学習者にも最も負担となる述部の動詞を整理して16語とした。そのため、文法構造がきわめて簡単になり、記憶し易くなった。このような多くの利点から、当時のイギリスの文豪バーナード・ショーをはじめ、ノーベル平和賞を受賞したチャーチル首相などが、ベーシック・イングリッシュを絶賛した。また、透徹した文明批評家として知られるH.G.ウェルズも国際的な補助語としての英語がこの21世紀に普及することを予告している。しかし、850語という厳密な語彙制限のため充分普及するまでには至らず、彼らが考案したシステムは廃れてしまった。そこで数年ほど前から、筆者は彼のシステムを再評価して、語彙制限を1,000語まで緩和し、その使用ルールを簡略化したグローバル・イングリッシュを提唱した。これを国際コミュニケーションの手段として活用すれば、われわれ日本人も自由自在に英語でコミュニケーションできるようになり、オグデンの大願が実現する日も遠くないであろう。

われわれ日本人が英語を自由に表現できない最大の原因は、単語の意味範囲が極めて狭いことにある。その結果、われわれの英語には誤用や誤解が頻繁に生じる。また日英両言語の構造の違い、発想法の違いがわれわれの英語使用にブレーキをかけている面も大きい。英語の単語の意味は一つとは限らない。とりわけ英語で多用される易しい語こそ多くの意味を持っている。とくに、日常よ

く使われる語彙には、英米人に特有な歴史的背景や彼らに固有の社会・心理的、文化的な経験が濃密に反映されている。そのため、多くの意味があり、総じてその音節は短いのである。たとえば、‘earth’ という語を聞けば、「地球」という意味を反射的に思い浮べる方が多いでしょうが、この語には「土、泥」などの意味もあるということ知っている方は決して多くないでしょう。さらに、“Your house is simply lovely.” という文における ‘simply’ は、「簡単に」とか、「単に」という意味ではなく、‘very’ の意味であるから、この文は「あなたの家とっても素敵ね！」という意味である。とくに、このような基本語に習熟していないと、いつまでたっても英米人の話の意図が正確に掴めなかったり、いざという場合に、自分の言いたいことが実際に表現できないという羽目に陥ることになる。この辺りの事情を考慮してL. ヴィトゲンシュタイン（1889-1951）は「語の意味を知っているとは、それを慣用的に使用できるということだ」と述べている。したがって、易しい単語こそ英語のあらゆる障害の因なのである。しかし、この問題も単語の心を把めれば一気に解消するであろう。

要するに、英語のセンス（英語的なものの言い方や考え方）は、基本語に習熟してこそ身につくものである。したがって、いたづらに単語やイデオムの数を増やすことに専念するよりも、日英両言語の表現をよく比較して、その発想法や表現法の違いをしっかりと把握した上で、正しい英語のリズムとともに、英米人が日常たえず使用するグローバル・イングリッシュの例文を内在化することである。しかも、最近はそれこそがわれわれ日本人に最適な「英語をマスターするための王道」であると実感している。

